

## 【第21回～第30回 まで】

【第30回研究会】 [(2013(平成25)年5月11日(土))] 発表者：橋本 榮介 氏

〔自主発表〕 「ひとはいさ」と題する論文の発表

発表者の橋本氏は、まさにマスロー心理学でいう、高次欲求の満足を基本動機として病苦との闘いを通して人生の真実を探求し続け、多くの気づきを得ました。

〈あらすじ〉

「末期ガン」から解放され、ガン患者会活動をした。その自主的集団の方を通して、日本の民主主義を考えた。民主主義は今浸透し始めた「複雑系」から考えても妥当な政治体制だと思われる。しかし、「複雑系」のパラダイムは、今枢軸をなしているニュートンによる、「還元主義的機械論科学」のパラダイムと異なる。地動説の分かる人は天動説も分かるが、天動説の人は地動説が分からない。同じように、今枢軸のパラダイムでは、「複雑系」は分かり難い。そこで、ガン治療の話のなかで、「複雑系」を離れた。そこを基軸とし、「個人の確立」の大切さを基に、生活に根ざした民主主義が文化として育つことを訴えた。その具体的活動例をしめしながら、もう一度、自分の考える「患者によるガン情報センター」を育てたい。その過程を通して「確立した個人」が増えることを望んでいる。

橋本氏は、1)ガン患者会の理事会のこと、2)ガン治療のこと、3)身体と意識 を柱に所論を展開しました。難解な術語の連続で聞き手の理解が及ばない点がありましたが、ガンによる死の淵から奇跡的に生還した橋本氏の壮絶ともいえる生きる産味を追究する真摯な姿勢は参会者に多大の感銘を与えました。ガン治療を通して橋本氏は、抗ガン剤で変わっていく身体、それにつれて変わっていく意識を感じ、その感覚は身体が主で意識が従であり、苦痛を盛じる身体の私こそ自分だと確信し、自分意識が鮮明になったと述べています。身体を脳でなく身体自身で感じられる感覚に安心したのです。メタ認知による新しい自己発見ではないでしょうか。橋本氏はもはやガンでは死なない、「今・ここ」を大切に情熱をもって理想をめざして生きていきたい、と元気いっぱい語りました。

橋本氏の発表で改めてガンへの関心を持ちました。ある情報によれば、ガンは、人間が進化する過程で発生する宿命性を持った病だそうです。人間が精子を増殖して子孫をつくっていく道を選んだことや、二足歩行によって脳を巨大化していくその増殖のメカニズムをガンも獲得したこと、人類発祥の地・アフリカから紫外線の少ない土地への移動によるビタミンD摂取の減少、産業革命や夜間勤務などのライフスタイルの変化によってガン発生のリスクが増大したことなど、いずれも人類の誕生と同時にガンの病が発生し、進化の過程でその代償として顕在化してきたというわけです。医学者はこの様々なメカニズムを探索するなかで、ガン細胞のみを消滅させる特効薬の開発に命を懸けています。このようにガンは生命の根源的な周題とも深くかかわっています。熱心にガン闘病記を収集している人がいます。自分に合った貴重な情報に接することがいかに大切かは、橋本氏の場合を見ても明らかです。

シャカの説く「四苦」(生老病死)のうちの「病苦」。橋本氏の発表により、参会者一同、自己や人生や生きる意味・力について、今一度深く考える機会を与えられ意義ある会でした。橋本氏は最後に最も大切なことは、自己確立だと述べました。誰でも口では簡単に言いますが、ガンと闘い、死と直面した人でこそ言える深く重い内容を含んでいます。その産味で橋本氏の発表は貴重な体験的人生論であり、生死をテーマの一つとする人間性心理学のこのうえない話題提供にもなりました。橋本氏はその折々の自身の心境を古歌に託し、数首紹介しました。

世の中に 絶えて桜の 無かりせば 春の心は のどけからまし  
久方のひかりのどけき 春の日に しず心なく 花のちるらん  
人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香に匂ひける  
願はくば 花のもとにて 春死なむ その如月の 望月の頃

【第29回研究会】 [(2013(平成25)年3月9日(土))] 発表者：中川 昌信 氏  
 テキスト：上田吉一(著)『ご遺稿』 第6章 マスローの警告する高次の病気  
 2. 健康性とB価値 について

1. 本文の要旨(遺稿の表)について

	病理性	欠乏性	成長性
真	知ることの恐れ	手段としての知的欲求	知的好奇心
善	反道徳(悪)	偽善・義務的善行	本性から出た善の欲求
美	美の恐れ	手段としての美的欲求	本能から出た美の欲求
人間関係	対人恐怖	依存的人間関係	独立的人間関係
自己	自己に対する恐れ	利己主義	自己受容・自己実現

2. 話題提供-1

否定的な言葉の意味の検討(悪意・憎悪・失意・敵意・無感動・劣等感・嫉妬・誹謗中傷・敬遠)

3. 話題提供-2

嫉妬をテーマにした菊池寛の短編小説(病床日記・無名作家の日記・第一人者)

4. 話題提供-3

荻野恒一著「嫉妬の構造」の内容(正常な嫉妬と病的な嫉妬、嫉妬に由来する犯罪、嫉妬からの解放)

5. 話し合い

- ▽ 依存的人間関係が欠乏性になっているが、人間は人という字の如く支え合っているのではないか。
- ▽ たとえば、買い物一つするにしても健康で、自分で買いに行くのに何ら支障がないのにすぐ他人に買って来て、と頼む人がいる。頼まれる方も断って角がたつといけなく唯々諾々と受けている。お互いに昔からの知り合い仲間ですべて狭い地域社会でよく見られる、もたれあいの、嫌な側面を見ているようで、とても健康とはいえず、何か欠乏している。気安く頼んではいるが、何となく上下関係の存在を暗黙に認めているからなのかもしれない。親子でも成長性の欄にあるように、独立的人間関係であらねばならず、親は子どもを自分の所有物としてはならない。
- ▽ 経済的に困難な場合でも、すぐ人に頼るのも問題である。自助、共助、公助という言葉があるように、先ずは自分自身の努力が大切。それでもだめな時は、地域社会が共に助け合っていく。それが限界のある時は、公の援助を求める。
- ▽ 見返りを求めない愛というのも成長性ではないか。無償の愛は親の心である。成長性の極致といえる。
- ▽ 夏目漱石の『行人』に出てくる一郎は本当に病的だ。嫉妬妄想に犯されている。
- ▽ 普通の人間でも嫉妬感情をもつことがあるが、高次病という場合は、その感情が妄想になり、殺人などの犯罪に及ぶことで、治療しないとイケない。恋人殺人や恋敵殺人がある。
- ▽ 一郎の友人のHは、一郎の相談にのっているが、永久に覚めなければ幸福とはどういうことか。
- ▽ 一郎は実にまじめな男で、真剣に自己の嫉妬に関わる苦悩についてHに必死に話しているので、今は安眠しているが、そのまま永久に覚めない、つまり死んでしまえば、ということだが悲しいことだ。
- ▽ 大切なことは嫉妬からの解放で、荻野氏が書いているように、嫉妬自体に問題があるのではなく、この感情に対する自我の処理の仕方、それは我執の絶対放棄とある。
- ▽ どうすれば我執は放棄できるのか。荻野氏は、その人が傍にいれば孤独ではないという人の存在、宗教的実在者、神仏の存在が必要としている。マスロー流に言えば、所属と愛情の欲求が満たされていることが大切ではないか。

【第28回研究会】 [(2013(平成25)年2月16日(土))] 発表者： 浜崎 順子 氏

テキスト：上田吉一(著)『ご遺稿』 第6章 マスローの警告する高次の病気

1. 高次病理の特徴 について

〈要旨と要約〉

マスローは、欠乏動機とは別に、高次のいわゆる成長動機が存在を指摘し、高次の挫折、そしてその結果としての高次病理の存在を明らかにしていった。その特徴として、

- ① 世の中の出来事に懐疑心、不信感が強くなる。その結果、非難、中傷、攻撃、憎悪の態度を繰り返す。
- ② 生きる意味を失い、失望、絶望、あきらめ、敗北感に満たされる。
- ③ 人生が無価値感に支配される。無力感、無関心、無感動のまま、ただ漫然と生きている。
- ④ 時周、空間とも極度に収縮された閉塞状態のなかに生きる。
- ⑤ 異常な感覚的刺激を求め、これに耽溺する。
- ⑥ 自己が完全に何かに決定されていると感じる。
- ⑦ 外部の刺激を極力避けようとする。

〈話し合い〉

- ☆ 高次動機の挫折とは何だろう。おそらく真善美といった高次な価値への欲求ではないか。
- ☆ 高次病理とは、高次動機の挫折によって、治療の対象になるほどのものだと思う。健康な人間でも大なり小なり体験するものだが、その程度が病的になるほどの深刻なものだ。☆世界の平和や貧困問題について憂う、ということは、どんな人もそうだと思うが、その心配が度を越していることではないか。
- ☆ 高次の人間性が健康であれば、自分の価値観で善悪が判別できる、とあるが、その人の価値観が自己中心的な価値観である場合もあるので、こういう言い方は妥当とはいえないのでは。
- ☆ 自己中心的な価値観と言う場合は、すでに健康な人間性とはいえない。
- ☆ 多くの挫折を繰り返すと無力感になるのか。ひきこもりやニートとどこが違うのか。
- ☆ ドン底まで落ちた人が立ち上がろうとすると、その壁が余りにも高いときそうなるだろう。あきらめの心もある。動物実験でも失敗経験を繰り返すと行動を起こそうとしなくなる。
- ☆ 高次病の人の作品が案外芸術作品にされていることもあると思う。紙一重のところもある。
- ☆ 著名な作家で、自殺する人がいる。芥川龍之介、太宰治、三島由紀夫、川畑康成等。芥川の遺書には、「唯ぼんやりとした不安」というのがあり、この言葉は当時の知識人の合言葉になつたらしい。事実、時は金融大恐慌、内閣総辞職、不況、無産派の革命運動の活発化で人々は不安な時代の到来を実感していた。芥川の死は、まさにその時代不安の象徴だ。このように時代に敏感すぎるのも高次病なのか。特徴の①にあるように、世の中の出来事に懐疑や不安感が強くなる、と言っている。芥川の場合は、時代の先駆的存在であり、時代を予告し、警告を発する先駆者としての意味があつたらしい。
- ☆ 高次病に陥った人は、悲劇よりもむしろ喜劇が訴えかける点が大きい、とあるがどういうことか。
- ☆ この解釈はむづかしい。話がそれるかもしれないが、テレビのお笑い番組にもの申したい気もする。やたらに共演者の頭をたたいたり、ののしったり、いじめたりして笑いをとるのがある。子どもへの影響が大きい。

【第27回研究会】 [(2013(平成25)年1月12日(土))] 発表者： 松山 哲也 氏

テキスト：上田吉一(著)『ご遺稿』 第5章 マスローの最高体験(前回の続き)

〈要 旨〉

7. B 認識、特に至高経験はそれ自体が価値の高い経験である。

- ① 全体的、統一的、全宇宙的な視点で、欠乏欲求でなく成長欲求でとらえる。
  - ② D 価値は欠乏欲求から生じ、B 価値は普遍性、絶対性をもつ。これには全体性、完全性、完成、正義、躍動、豊かさ、単純、美しさ、善、独自性、融通無碍、遊び、ありのまま、自己充足がある。
8. 至高経験は相対的でなく絶対的な経験である。『源氏物語』は現在においても生きており、この瞬間においても新しく、さらに将来永遠に残っていくと思われる。
  9. B 認識は受け身で受容的な認識である。能動的な働きかけでなく、むしろ観察されるものの「為すがまま」に任される、謙虚で無干渉的な態度で感じとるもの。受け身に徹してクライアントのありのままの考えを聞くのが良い治療者である。
  10. 至高経験にみられる B 認識では、対象は偉大なものとして受け止められ、驚異、畏敬、尊敬、敬服の念で眺める。

#### 〈話し合い〉

1. 至高経験とあるが、まさに体で受け止めるという意味で至高体験がよいのでは。
2. 成長欲求の世界は神の立場から見た世界とあるが、神と言う言葉を使うのは科学としての心理学としては抵抗がある。
3. まさに没我の世界であり、人間性を超越しているという意味だと思う。
4. 人のうちに欠陥が認められても、憐れみと慈悲と親切と慰めを与えることに尽きるとあるが、人を見下げた表現が気になる。ありのままに尊敬の念をもって受け入れるとあれば納得できるが。互敬という言葉がいい。
5. いろんな言葉が羅列されているが、例えば完全性と完全とは統合できないか。「ありのまま」はいつでもいいのか。——このことばは『人間性の最高価値』でもあるように深い意味がある。芭蕉の句に「よくみれば なずな花咲く 垣根かな」があるが、「よくみれば」とことさらに断ったような口ぶりは写生の筆法ではない。ふと心にとめてみたら、なずなのような雑草にも白い花が咲き、あまねく春色を感じたのである。まして花卉は何枚あるかという分析的な態度はない。あるがままに受け入れている。鈴木大拙の『東洋の心』にもある。西洋は分析であるのに対し、東洋は直観だという。
6. B 認識では神への信仰も含まれるとあるが、大切なところだ。特定の宗教という意味でなく、宇宙を支配し、万物を創造する何者かが存在することは誰しもも認めている。そういう大いなるものに比べれば、人間はちっぽけな存在である、とある。ロンドン大学のラワリー教授は、これを cosmic modesty（宇宙的謙遜）とよんでいる。人間にとっては、この謙虚な心が大切だ。この心を忘れれば人間は傲慢になり、滅びてしまう。
7. 経験が最高潮に達しても、また現実の生活に戻り、再びそこからさらに高次の価値を目指して生きていくことによって、人間は成長していくのではないか。

---

**【第26回研究会】** [(2012(平成24)年12月8日(土))] 発表者：森 光巧悟 氏  
テキスト：上田吉一(著)『ご遺稿』 第5章 マスローの最高体験

#### 〈要旨〉

至高経験は、自己実現を遂げた人及び普通の人が一時的に自己実現を遂げたとされるような無状態になったとき、はじめて体験できる特異な精神状態である。その意味は広く我々凡人が日常体験するような静寂な幸福感・安定感を含んでいる。芸術家が創作に熱中する無我の境地、アルキメデスが原理を発見したときの精神の集中、愛する自分の子を見つめる母親、B 認識における無我・無欲・無私の状態などがそれである。

#### 〈話し合い〉

1. 至高経験があるかについては、低次元だが、毎晩入浴した際、あーという幸福感に満たされることがある。それは生理的欲求の満足ではないか。性的欲求の満足もそうで、至高経験はそんなレベルで

はない。飛行機からヒマラヤを見たときは深く感動した。

2. 集中すると時間や外部の音が気にならない。コンピュータではありえない。横山大観の描いた「無我」という絵は、本当に無欲、無私のできない童である。精神を集中させねばという気もない。しかし、マスローの『人間の最高価値』を読むと、こういうあどけなさや無邪気さとは区別している。
3. 人との関係で対象の本来の姿を客観的に見るのが大切であるといっても、いやみを言う人に会うと、安全欲求が働き、君子危うきに近寄らずで、離れたくなる。客観的に見た後どうなるのか。例えば、認知症の人とかかわっていると、自尊心だけは強く保持していると思ってこういう人とは離れたいと思うが、それでは気の毒だといって忍耐力をもって関わりを続けている人もいる。
4. B 認識はナンバー 1 よりオンリー 1 として見る。芸術作品との違いは何だろう。この間、現代世界美術全集を見たが、それぞれ個性的な創作で感動した。上村松園や横山大観の日本画はナンバー 1 と同時にオンリー 1 だ。松園は幼少の時から描くのがすきで、師匠につき、やがて師を乗り越え、浮世絵美人とは全く異なる、凛とした独自の美人画を極めた。
5. 注意しないといけないのは、個性という考え方だ。人の迷惑を考えない勝手気ままの人はよくない性格の人で直さなければいけない。個性的な生き方とは他人が持っていない独自のもので世の中に貢献できる人のことで、これは大切に育てていかなければならない。
6. 子どもの絵の評価は難しい。ずっと前、1 年生の絵によくも 5 段階評価をしてきたと思う。幼児や低学年の子の絵は心の表現だ。一生のうちでも貴重な作品だと思う。中学年になると写実性が出てきて実物に近づける。高学年になると対象に美を求めて描くようになる。子どもの絵といってもこういう発達過程を考慮する必要がある。

※ 横山大観「無我」 近代日本画を拓いた巨匠の出世作。無我とは世の無常に己の存在を否定する意。大観は幼児の天真爛漫の姿に見立てた。あどけない顔はどこを見るでもなく殆ど呆然とあらぬ彼方を見ている。明治 30 年日本絵画協会展で銅賞。(絵そのものは画集などを参照されたい)

---

**【第 25 回研究会】** [(2012(平成 24)年 1 1 月 2 4 日 (土))] 発表者： **河野 憲一 氏**  
テキスト：上田吉一(著)『ご遺稿』 第 4 章「マスローと知の世界」  
3 「学習にみられる概括」について

〈要 旨〉

1. 学習にみられる概括

一つは習慣である。記憶、暗誦、反復練習などの学習は、経験の新たな受容を抑え、規制の経験のみを繰り返すことで、新しい経験の獲得に途をひらく創造性と対立する概念である。しかし、習慣という学習形態だけが学習の全てではない。悲惨な体験が人格に危機的ともいえる悲しい衝撃を与え、人生観の転換をもたらし、成長をとげる創造的な学習もあり、新しい世界認識につながる洞察学習もある。

2. 思考についての概括

先行研究に近い問題をとりあげたり、未開拓の問題への挑戦を避けたりするのが思考についての概括である。特に思考過程や解決家庭で数量的に扱ったり、動物実験を使用することを決めてかかり、独自の解決方法を考えない。また、はじめから予定されている結論に達するように知的活動を誘導していくのも概括である。むしろ学習の行き詰まりが思考活動の出番であり、考えるということは習慣を破壊し、過去の経験を無視する力といえる。マスローの認知論は、第一に創造性の重視、第二に認識が現実から遊離し、抽象化することへの強い懸念や危惧、第三に現在の自然科学的認識のあり方に代わる新たな心理学的研究法の採用、経験の直感、受容、共感が重要である。

〈話し合い〉

1. 「歴史を学ぶ」ではなく、「歴史で学ぶ」態度が大切である。
2. 習慣による慣れから油断したり、マンネリになったり、誤ったゆとりから創造性が失われてはなら

ない。

3. 語学への関心は単に発音や文法だけではなく、異文化に対する知見、発想、異文化 4(人)とつながる意欲の育成、自国文化の認識と発信等もある。
4. ただ不幸であることが人間的成長をもたらすのではない。人生観の転換が迫られるのは、①人との出会い、②言葉(本)との出会い、③自然(生命・宇宙)の神秘との出会いである。これらとの出会いを契機として、心の中に潜在していた成長エネルギーが発現してくる。ここでは「何か偉大な宇宙生命への帰属意識」「先祖代々から連綿と受け継がれてきた結果、今の自分があるという命の育みへの感謝と子子孫孫への大きな人間愛、人が生きてきたこと、生きていくことの意味が自覚でき、他者からも大切に尊重されるということがエネルギー源になる。所属と愛情、尊重欲求の充足である。
5. 山登りにたとえば、登山方法を問題にするのも概括。どの山に登るかが問題でなく、未知の山を避けたり、登山方法の適性を主張する。

#### 6. 人間の反応の多様性

S-R から S-P-R の考え方へ

刺激・環境の変化に応じて精神も変化していく。どんな環境下でも健全な精神があれば健全な反応が期待できる。例えば、個性の大胆な表現、自由、自発性、自身など。統計学的手法は、精神を固定し、環境に変化をつけて反応を推測するものだ。

---

【第24回研究会】 [(2012(平成24)年9月8日(土))] 発表者：松山 哲也 氏

テキスト：上田吉一(著)『ご遺稿』 第4章「マスローと知の世界」

#### 〈要旨〉

##### 1. 注意にみられる概括

- 注意が絶えず変化をとげる対象物に対して全面的に注がれてどのような事実にも柔軟に注意力が保たればよいが、そうでないと先入観に支配されたり、固定観念が合致する特性のみを見てそれ以外を無視している。
- 比較的健康で自己実現をとげている人は相手の人となり全体を、しかも独自のまに見る。
- 科学者はものごとを知っているためにこれを見ることができ、芸術家はものごとを見ることのできるためにこれを知る。

##### 2. 知覚にみられる概括

- 知覚に選ばれた対象が感覚器官によって受け入れられ、一定の表象として認められるようになった状態であり、ステレオタイプの概括が行われる。
- 健康な人のもつ知覚では対象となる経験の一つ一つがかけがえのない独自性をもつものとして捉えられる。

#### 〈話し合い〉

1. 概括によりありのままの姿を認知することが妨げとなることが多いが、概括なしに人間は物事を認知できないのではないか。
2. 自分の悩みや不安を言葉にすることができずイライラする若者に対する的確な言葉かけをして救われたと言ってくれたことがある。
3. 概括が悪いのではなく、概括に支配されてしまうことが問題である。
4. どんな些細なことでも、仮にどんな悪いことがあっても、その子の自己実現につながる理解でありたいものだ。
5. 「星の王子」にあるように、本当に大切なものは目に見えない。大人になるほど見えにくくなるのではないか。
6. 臨床や教育の場では子どもの自己実現につながる理解であってほしい。
7. 子どもだけでなく教師も含まれていると思う。教育の場では客体変様より主体変様が大切といわれ

ている。子どもを知る努力といった過程を通して教師も成長していく。教育は教師からの一方的な働きかけでなく、教師と子どもとの相互の営みだからである。

8. 子どもに概ねの理解（概括）を示すことの有効性と先入観といった限界性が理解できた。
9. 眼前の一事、現象でなく、全体的で生に向かう自己実現を考えなければならない。
10. 教育現場では、問題への対処で教師は常に絶対矛盾の自己統一で過ごしている。

【第23回研究会】 [(2012(平成24)年9月8日(土))] 発表者： 山野 晃 氏

テキスト：上田吉一(著)『ご遺稿』 第3章「人格の完成」

2. 「自己実現する人間の特性」について

〈要 旨〉

自己実現する人間は、①堅実を正しく知る ②自己、自然、他人を受け入れる ③高い自発性 ④問題中心の生き方 ⑤プライバシーや孤独に対する欲求 ⑥斬新な鑑賞眼をもつ ⑦豊かな社会感情 ⑧民主的な性格 ⑨善悪、手段と目的の明確な分別 ⑩ユーモア感覚 ⑪豊かな創造性 ⑫特定の文化からの超越など、の特性をもっている。

〈話し合い〉

- ◇ 自己実現人間の欠点にはどんなものがあるか
- ◇ 小口忠彦は具体的にいくつか挙げている。自己実現する人間の特性は 15 あるという。
- ◇ 要は欠点のない完全な人間など存在しないということだ。人間は善と悪の両面を持つアンビバレントな存在だと思う。
- ◇ 次のような表をつくってみたらどうだろうか。

人物	特性 1	特性 2	特性 3	特性 4	特性 5	……	特性 13	合計	自己実現者かの 判定
A	◎	◎	△	○	◎	--	◎		
B	○	◎	◎	◎	△	--	◎		
C	◎	○	◎	△	○	--	◎		
D	△	△	△	◎	◎	--	○		

縦の欄は人物で、横の欄は自己実現する人間の特性を表している。こうすると満点ではないが、総合的に自己実現する人間が出てくる。やや機械的だが。

- ◇ 前回に出た聖人の場合、判定はどうなるのだろう。
- ◇ 自己実現の特性を持った人格を育てるのが「教育」の役割だ。
- ◇ 戦後の教育はマスローのような人間信頼の心理学を基本に進められている。
- ◇ 政治的に「期待される人間像」が出されては消えたりしてきた。上からの目線ではなく、現実の人間を詳しく見るなかで、人間の理想を追究していく姿勢は大切だ。
- ◇ 竹島問題ではどのような解決があるのだろうか。国どうしの冷静な話し合いと国際世論に訴えていくしかないのではないか。情に偏しないようにしないと。
- ◇ いじめは少なくすることはできても全くゼロにすることは不可能だろう。
- ◇ 学校からの報告でいじめの数が多い＝よくない学校という単純な見方はいけない。
- ◇ いじめも万引きも初発段階で、それは悪だという厳しい叱責が必要。その時の後悔や悔悟により、そんなことを全く経験しないで成人した人よりかえってたくましい性格が形成されることもある。非行少年は初発の段階で不幸にも叱責される機会がなかったのかも。

【第22回研究会】 [(2012(平成24)年7月29日(土))] 発表者： 中川 昌信 氏

テキスト：上田吉一(著)『ご遺稿』 第3章「人格の完成」

1. 「理想的人物の研究」について

〈要 旨〉

マズロー心理学は理想的人間の研究である、理想的人間は教育目標としても、臨床心理学の目標としても、人生目標としても追究に値するものである。その人物には天才、英雄、偉人、聖人がある。しかし、文化相対主義の立場からいうと特定できない。しかし、マズローは、理想的人間の絶対性を見出し、自己実現する人間の研究に生涯を捧げた。

〈問題提起〉

▽ マズロー心理学の概念の深さ、広さを感じさせられた。

▽ 理想的人間の一つに「聖人」をあげている世界4聖人として釈迦、イエス、孔子、ソクラテスがいる。マズローはこれら実在した人間の人物研究を十分したのであろうか。しなかったとすればなぜか。これらの聖人には慈悲、仁、利他愛、無知の自覚等人類共通の普遍的徳性がある。これらはマズローのいう「文化の絶対性」ではないだろうか。

▽ マズローは聖人ではなく、それに及ばない72名の著名な学者、政治家、芸術家を研究対象にしたが、そこから得られた自己実現人間の特性は、当然欠点も含み、聖人には及ばない。これはマズローのいう「天井の心理学」になっていないのではないか。

▽ 聖人の共通性として「人々の心を救うために自己の全生命をかけて犠牲を払った。しかしそのことが決して苦勞でもなく、最高の喜びでもあった」と考えられるが、こういう神の如き人間性を超越した人物は人間性心理学の研究対象にならないのだろうか。

〈話合い〉

▽ まず「文化相対主義」について。

これは、どの文化も自分たちの価値観が正しく、他の文化より優れているとは断言できず、まして自分の価値観を他の文化の人々に押しつけてはならない、という反省的、倫理的態度から出ているのであって、その反意語は自国文化中心である。マズローのいう文化の絶対性の反意語でないことに注意したい。

▽ 4聖人の教えに共通性があることは分かったがそれ以外に共通性があれば。

▽ 第1に実在した人間であること。第2に生まれた年が釈迦もソクラテスも孔子も約2500年前、イエスが約2020年前で似ている。まさに文化爆発の時代といわれているが、奇妙なことにこれ以後、これら聖人に匹敵する人物が生まれていない。

▽ ホフマンによれば、マズローは27歳頃は、なお文化相対主義を信奉していたが、30歳の時、ブラックフット・インディアンのもとでのフィールドワークに参加して彼らの生き方に感心させられ、人間の本性への理解が妨げられるとして文化相対主義の概念を永久に捨て去った、という。

▽ 問題提起から感じることは、我々は列挙された自己実現人間の特性を学んだが、もっとはるか高い人物の研究はしていない。

▽ 高い人物研究もいいが普通人間が持つ俗っぽい人間性も取り上げ、階層的にそれが徐々に高みに発展していくプロセスを追究していくような研究でありたい。病的人間対象のフロイトまで行く必要はないが。



【第21回研究会】 [(2012(平成24)年6月2日(土))] 発表者： 森 光巧悟 氏

テキスト：上田吉一(著)『ご遺稿』 第2章「人間における欲求の段階」

3 「人間観の転換」について



### 〈要 旨〉

- ☆ これまでの欲求といえば、きまって欠乏欲求のみ考えられてきた。
- ☆ 人間は、はたして欠乏欲求の満足のみで生きる存在であろうか。
- ☆ 人間不信の人間観から、人間尊重の人間観への転換——人間の崇高、気高さをも認識する心理学を確立した。

### 〈森氏の問題提起〉

人間の限りない欲望の例として秦王朝の墓がある。足るを知ることで人は幸福になれる。しかし、ブッダは欲をもつことを否定していない。極端に走ることなく中道を説いている。そして相対的な価値の相互承認が行われれば自然と調和してくると説いた。

### 〈話合い〉

☆ 仏教、キリスト教など宗教との関わりを詳しく話された。ここではマスローの人間観が人間性の良さを信じるということだったが、宗教が聖なるもの、絶対なものへの憧れ、救いを見出そうとする人間心理という点において、お説の通りマスローと宗教とは無関係ではないと思う。

そこで、興味をもったのは、森氏は個人的には神道と関わりがあると述べられたが、灰聞によれば神道は特に清明心を重視されるようだ。汚れを排除し、清明なものを求めようとする人間の心は本来誰にもある人間の本性であり、それを研究対象とするのはマスローの人間観と一致するようだが、この点についてはどうか。

☆ 人間の弱さ、限界を感じ、補うものが宗教であり、この点については個人によって異なる宗教があってよい。

☆ いつのまにか金銭的な価値が人間の心を大きくとらえてしまった。不老不死の薬は存在しないのだ。

☆ 今回は宗教の問題が大きく論議されている。強調したいのは、宗教的情操の教育が手薄になっていることだ。

☆ 教育基本法には、国公立の学校では特定の宗教教育をしてはならないと規定されている。

☆ そのことを警戒するあまり、戦後、宗教についての教養や寛容の態度は教育上重視されねばならないという法の意義が消しさられ指導が及び腰にってしまった。

☆ 宗教的情操というのは今まで論議で出てきたように、偉大なもの、大いなるもの、人間の力を超えたものの存在を感じ、それに憧れ、畏敬し畏怖さえする持続的な感情だ。マスローの指摘する大切な人間心理だ。

☆ なぜそのことの教育が大切なのか。

☆ それは人間が生かされている存在であることを自覚させるためだ。そのことを自覚することで人間は謙虚になる。大自然の前には、人間はいかにもちっぽけだ。ロンドン大学のラワリー教授はこれを「宇宙的謙遜」(Cosmic Hodesty)と呼んでいる。

☆ 科学万能の人間の奢りりを今一度反省しなければならない。

☆ 一面警戒すべきは政治的に閉塞感が高じると、人は自由を捨てがちだということ。フロムが『自由からの逃走』で書いている。